

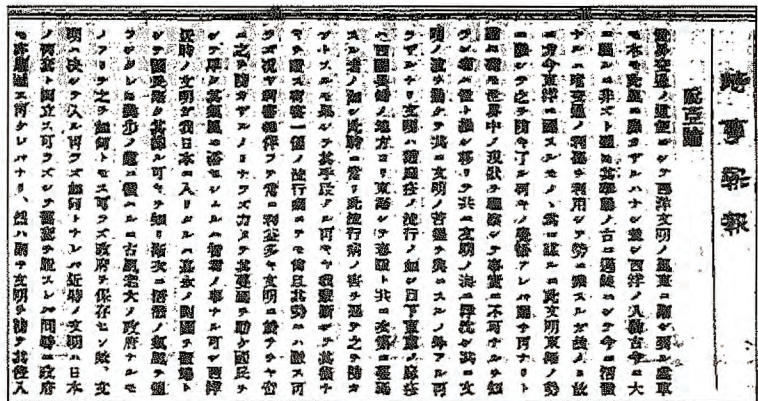
背信違約は彼等の持前にして毫も意に介することなし——福澤諭吉の中の朝鮮

福澤——朝鮮開化派への接近

福澤諭吉が主宰する日刊紙『時事新報』が創刊されたのは、明治十五年三月一日である。福澤は明治三十四年に六十六歳で没するまでの二十年近くにわたり、論説を書きつづけた。朝鮮問題は、そのなかでも圧倒的に頻度の高いテーマであった。

朝鮮近代化の夢の実現のために、開化派官僚を慶應義塾に招き入れ、義塾の門下生を朝鮮に派し、開化派

にして毫も意に介することなし。既従来の国交際上にも屢は実験したる所なれば、朝鮮人を相手の約束な



1885年3月16日 時事新報「脱亜論」

に政治的決起を促し、一度はクーデターに成功するものの、守旧派と支那(清国)の逆襲に遭って最後は無

残な失敗に終わり、福澤は朝鮮近代化の詮なきを悟らされて、悄然、朝鮮論の筆を断ち、逝去にいたったのである。

朝鮮に対する福澤の深い絶望を記した一文に、明治三十年十月七日付で掲載された論説「事実を見る可し」がある。この文章が書かれたことの経緯についてはのちに述べるが、ま

らば最初より無効のものと覚悟して、事実上に自から実を収むるの外なきのみ」

現代語訳

へもともと朝鮮人は数百年この方、儒教の中毒症にかかりつづけた国民であり、道徳仁義をつねに口にしているものの、心底は腐敗しており、その醜くけがらわしいさまは言い表すことがほとんど困難なほどである。身分の高い者から低い者まですべてがみせかけだけの君子の巢窟であり、誰ひとりとして信頼できる者がいないことは私(福澤)の長年の経験に照らしても明白である。このような国民とはどんな約束を結んでも、背信と違約が彼らの本性であるから、これを意に介する必要はまったくない。すでにこれまでの外交においても、もしばしば経験済みのものであり、朝鮮人相手の約束ならば、はなから

ずはその原文と筆者の現代語訳を記しておく。

原文

「本来朝鮮人は数百年來儒教の中毒症に陥りたる人民にして、常に道徳仁義を口にしながら其衷心の腐敗醜穢、殆んど名状す可らず。上一一般、共に偽君子の巢窟にして、一人として信を置くに足るものなきは、我輩が年來の経験に徴するも明白なり。左れば斯る国人に対して如何なる約束を結ぶも、背信違約は彼等の持前

無効のものだと覚悟して、日本はみずからの実利を追求するより他ない」

明治十四年の六月、朝鮮開化派の若手リーダーが、文明論者として朝鮮でも名を知られる福澤を三田山に訪ねてきた。日本の開国、維新がいかにして成ったかについての持論を聞きにやってくるころから、福澤と朝鮮との関係が始まる。

福澤は彼らからの問に答えながら、朝鮮の現状についてさまざまのことを聞き出す。そして朝鮮が旧態依然たる専制政治のもとにあることを知り、明治維新にならって旧態を改革せんとする若手開化派の心情にいたく感銘を受けたのである。

彼らから聞く朝鮮の現状は、門閥制度によって人間の身分が決められ、人間の努力によって身分を上昇させる可能性などまったくないこ



渡辺利夫 拓殖大学理事顧問・前総長

とを福澤は知らされる。

「門閥制度は親の敵で御座る」という怒りを胸に秘め、中津に母と姪を残して長崎、次いで大阪の適塾に出ていった頃のことを福澤は思い起こす。そして明治維新という大業を、幕臣でありながらも「傍観者」として遣り過ごしたことに改めて気づき、自分の文明開化論の実践の場が朝鮮なのではないか。そういう思いに次第に駆られていった。

甲申事変

「人間娑婆世界の地獄」

朝鮮近代化の屈折点となる「甲申事変」の主役、金玉均が明治十五年三月に福澤邸を訪れた。福澤は金玉均と議論を重ね、さらに朝鮮近代化のための必要条件を日本のさまざまな指導者から直接聴取させようと、井上馨、三条実美、岩倉具視、渋澤

栄一、後藤象二郎、大隈重信、伊藤博文などに金を引き合わせる。

数カ月の滞日を通じて金は、「日本の国家と国民は現状打破を援護する唯一の友邦」という確信をもって、朝鮮に戻らうと下関にいたる。そこで、金は「壬午事変」の報を聞いて驚愕する。

国王高宗の実父・大院君が、大量の清国軍の支援を受けて閔氏政権を打倒した事件が、明治十五年七月の壬午事変である。攘夷思想を強くもつ大院君は、日本人殺害、日本公使館焼打ちの挙に出た。これに反発する日本軍が臨戦態勢をもって臨んだものの、袁世凱率いる清国軍の軍勢の前になす術はなかった。清国軍は、何と大院君を天津に拘送するという信じ難い行動まで取った。

金玉均は、のちの「甲申事変」で同志としてともに闘う朴泳孝を同道し

開かれた郵政局の開設式典において、金玉均、朴泳孝らは策を用い、事大派主謀者を殺害してクーデターを成功させた。翌日には新政府の樹立を宣言、清国に拘送されている大院君を帰国させ、何より門地門閥制度の旧弊を廃し、人民平等の権を制定する旨を内外に発した。宣言には福澤の思想がにじみ出ている。

しかし、殺害を逃れた事大派官僚が清国軍に出兵を要請、これに応じ、再び袁世凱率いる清国の大軍が京城に押し寄せ、開化派は敗走。金玉均、朴泳孝らは仁川に停泊中の郵船会社汽船に辛くも拾われ、日本に逃亡した。文字どおりの「三日天下」であった。

金玉均は福澤にかくまわれ、その後の十年余を東京、札幌、小笠原などで、朝鮮からの刺客から逃れるようにして身を潜め、再起の機会をう

て、再度、福澤邸を訪ねる。両人は福澤のもとで、朝鮮近代化のノウハウを得んと必死に学んだ。この頃の福澤の朝鮮開化派への期待には、実には大きなものがあつた。ただ論じていたばかりではない。牛場卓蔵や井上角五郎などの慶應義塾の門下生を朝鮮に派し、開化派支援に当たらせた。

その一人、牛場卓蔵への期待をつづった書簡は、それ自体が福澤の文学のごとくである（「牛場卓蔵君朝鮮に行く」明治十六年一月十一日付、二十九日付）。井上角五郎には朝鮮で新聞を発行させ、福澤、井上、金玉均とはモースルス信号で連絡しあい、また乱に備えて数十口の日本刀を井上のもとに送ったという記述がある。

朝鮮開化派によるクーデター「甲申事変」は、明治十七年十二月四日の夜に勃発。各国公使代表ならびに事大派官僚のトップの出席を仰いで澤の論説が「脱亜論」である。「世界交通の道、便にして、西洋文明の風、東に漸し、到る処、草木も此風に靡かざるはなし」で始まり、「我れは心に於て亜細亞東方の悪友を謝絶するものなり」で終わる二千四百字ほどの論説である。エッセンスを要約しておこう。

〈開国・維新時、日本の指導者は文明と旧套が両立することはあり得ないことを悟り、旧社会に恋々たる旧政府を倒して新政府を樹立し、文明の積極的な導入により立国をなした。重要なのは国家であり、その時々々の政府ではない。当時の日本の指導者は皆そう考えた。かくして、日本はアジアの中にあつて唯一、文明の新機軸を打ち立てることに成功した。すなわち当時の日本の指導者が擁したものは、旧套のアジアからの脱皮、すなわち「脱亜」の二字のみ

かがつた。日本に逃れた者以外の甲申事変の主謀者は、すべて朝鮮政府によつてきわめて残忍な刑に処せられた。甲申事変首謀者への無情きわまりない重刑のことを伝え聞いた福澤の心は憤怒に満たされ、明治十八年二月二十三日、二十六日付の論説として「朝鮮独立党の処刑」を掲載する。

「人間娑婆世界の地獄」が京城に出現した。朝鮮は野蛮などというレベルをはるかに超えた「妖魔悪鬼の地獄国」と化し、その残忍なありさまは「寒心戦慄」するばかりだと記して、朝鮮を難じた。

亜細亞東方の悪友を謝絶するものなり

「朝鮮独立党の処刑」執筆の十八日後の三月十六日付論説として、激憤の感情をそのままに一気に認めた福

であったというべきである。

その一方、支那、朝鮮は、旧来の政治や宗教、風習の弊を破る気概をまったく欠いており、そこから文明へと向かって一步も踏み出そうとはしない。日本と支那、朝鮮は明らかに異種の存在である。教育においては儒教主義、その趣旨は仁義礼智、外見の虚飾に拘泥して世界の真理原則を知らうとせず、何と道徳さえ地を払って残酷不廉恥をきわめている。

私(福澤)の見立てによれば、支那、朝鮮がこの「文明東漸」の風潮の中で独立を維持できようとは思われない。もしも人心の一新を図らんと文明開化を求める志士が支那、朝鮮にあらわれ、日本の開国・維新のよいうな大業に乗り出そうというのであれば話は別だが、どうもそんなことが起こる気配はない。これでは支那、朝鮮が西洋列強に領土分割され、そ

の支配の手に落ちることはやむをえないのではないか。

また、支那、朝鮮がこのような旧套の状況そのままであれば、日本も支那、朝鮮と同じ東洋に属している国なのだから、これら三国は同類のものともみなされてしまう危険性がある。これは日本にとって一大不幸というべきである。

日本も支那、朝鮮と同様に、法治にもとづかない専制国家であり、科学に關心のない「陰陽五行」の国だとみられかねない。支那、朝鮮の残酷な処刑のありようをみて、日本でも同じようなことをやっているにちがいないと思われてしまう。こんなことに日本は耐えられない。

支那、朝鮮と一緒にあってアジアを興すゆとりなど日本にはもうない。逆に、アジアから脱して、文明国と進退をともし、支那、朝鮮と

は隣国だからといって、特別の交際のマナーは必要ではない。西洋人が支那、朝鮮に接するのと同様の付き合い方をやっていけばいい。

悪友と親しむ者はともに悪友とみなされても致し方ない。私(福澤)は少なくともその心中においては、アジアの悪友とは交友を絶ちたいと考えている。

朝鮮人民のために 其国の滅亡を賀す

この時期、西洋列強の極東アジアへの侵略的行動が露わとなつてくる。ロシアの南下政策に抗してアジアに進出を繰り返すイギリスは、ウラジオストク攻撃の意を固めて、明治十八年四月、朝鮮半島南端の巨文島を朝鮮への事前通告なく占領。あからさまな力の発動だが、朝鮮にはイギリスの強硬策になす術がない。

この巨文島事件は、イギリスがロシアと折衝、占領を解いて何とか大事にいたることはなかったが、日本の地政学的な位置、列強のしのぎあいの場が眼前に迫ってきたことを、日本人に広く知らしめたできごとであった。

そのうえ、当時の日本は、イギリス、ロシアはもとより、清国に対抗できる十分な軍事を擁してはいなかった。「定遠」「鎮遠」「威遠」「濟遠」などの清国艦船を長崎に停泊、兵士を上陸させて日本を威嚇する「長崎事件」に日本人が震え上がるという事件も起こっていた。

隣国の朝鮮が「力の空白」状態におかれ、巨文島事件に象徴されるごとく、列強がいつも簡単にその空白を埋めかねないという事実は、福澤には大きな脅威として映じた。朝鮮

自身に独立すべき気概も国力もないのであれば、イギリスのような強国の傘下にみずから入り、その保護国

もしくは植民地になったほうが、朝鮮の人民のためにはいいことではないか、とさえ考えた。

明治十八年八月十三日付には、「朝鮮人民のために其国の滅亡を賀す」という激しいタイトルの論説を書いた。

「他国政府に亡ぼさる、ときは亡国の民にして甚だ案まずと雖ども、前途に望なき苦界に沈没して終身内外の恥辱中に死せんよりも、寧ろ強大文明国の保護を被り、せめて生命と私有とのみにても安全にするは不幸中の幸ならん」という。

この論説は、「脱亜論」と並んで、福澤の朝鮮との訣別宣言であるかのように受け取られかねない。まった

くそんなことはない。福澤の朝鮮論はなおつづく。

金玉均は、李鴻章の養嗣子で駐日公使の李経方(わな)の畀にはまり、明治十七年三月二十七日、上海に赴いた。到着の翌日の午後三時、上海のホテルで朝鮮から送られた刺客から拳銃三弾を浴び、即死。遺体は清国の軍艦で朝鮮に運ばれ、凌遲刑に処せられた。金玉均一族にも刑は及び、父は銃殺、父と妹は刑を潔しとせず自裁、弟は金の滞日中に獄死。

金の遺体が清国艦により朝鮮に送られたという情報を手にするや、福澤は明治二十七年四月十三日付の論説を「金玉均暗殺に付き清韓政府の処置」と題し、「日本人の感情は到底釈然たるを得ざる可し」として、日本人の対清、対朝感情は一挙に先鋭化し、疑念をますます深め、これが敵



福澤諭吉の奥義が詰まった決定版!
青鳥社 1620円(税込)

意に変じていくのではないか、という不吉な予感を文章化する。

こうしているうちに、朝鮮で「東学党の乱」が発生。明治二十七年二月、全羅北道の郡主の苛斂誅求に抗して、東学党と称される秘密結社を中心に起こった大規模な農民蜂起であった。

全羅北道の道都全州は李氏朝鮮の発祥の地(「本貫」)であり、ここが反乱農民に制圧されたのである。朝鮮政府は清国政府に援軍出動を要請、大量の清国兵が投入されるに及んで、当然、日本も出兵。

東学党の乱は平定されたものの、日清両軍は半島での残留を余儀なくされる。一方が引けば他方の占領になるという理由だが、さりとて乱平定にもかかわらず兵残留というのは、列強の猜疑心は収まらない。そ

福澤は、支那と朝鮮に強硬な立場で臨んでいるものの、決して朝鮮を併合しようという意図はない。朝鮮を清国から独立させ、真の文明国家にしたいというのが福澤の意図であった。

明治二十七年七月五日付の論説「土地は併吞す可らず国事は改革す可し」は、「朝鮮の国土は之を併吞して事実には益なく、却て東洋全体の安寧を害するの恐れあるが故に、故さ

こで時の外務卿・陸奥宗光は駐清公使・大島圭介を介し、五月三十一日「日清共同内政改革提案」を朝鮮政府に提出。朝鮮政府は一度はこの提案を呑んだものの、数日後に全面拒否の回答を出す。

朝鮮の背後から、朝鮮に提案を拒否させたのは清国である。日本は提案拒否を開戦の大義名分として、日清戦争となった。開戦の詔勅が出されたのは、明治二十七年八月一日である。

朝鮮の事大主義

開戦に先だつ明治二十七年(一八九四)年七月二十四日付の福澤の論説が、「支那朝鮮両国に向て直に戦を開く可し」である。朝鮮政府の行動は「正気の沙汰」とは思えないが、清国を後ろ楯とする朝鮮ならばやりか

らに会釈して之を取らざるのみ」と記す。「会釈」は、ここでは「遠慮して遠ざける」の意である。

日清戦争とは国益のための戦いではなく、実に文明と野蛮との戦い(「文野の戦争」)だとして、七月二十九日付の論説「日清の戦争は文野の戦争なり」を掲載。日清戦争の根源にあるものは「文明開化の進歩を謀るものと其進歩を妨げんとするものと」の戦いにして、決して両国間の戦いに非ずと云いきる。

日本は日清戦争に勝利して朝鮮の自主独立を再確認させ、「清韓宗属関係」の「切断」に成功した。「宗属」関係とは、「宗主国」と「属領」との関係の意である。しかし、これで朝鮮の独立が成ったかといえは実はそうではない。日清戦争で日本が清国から割譲を受けた遼東半島が、露独仏の三国干渉により清国還付を余儀な

ねないことだとして、清国への朝鮮の「事大主義」を論難する。「事大」とは「大に事える」の意である。

敵は明らかに清国にありとし、福澤は同論説において「一刻も猶予せず断然支那を敵として我れより戦を開くに如かざるなり」と認める。

日清戦争は日本の勝利に終わり、明治二十八年四月十七日、下関で開かれた日清講和会議において講和条約を結び、第一条を「清国ハ朝鮮国ノ完全無欠ナル独立自主ノ国タルコトヲ確認ス」とした。

江華島事件に端を発する日朝間のトラブルを経て締結された明治九年二月の日朝修好条規第一条「朝鮮国ハ自主ノ邦ニシテ日本国ト平等ノ権ヲ保有セリ」の再確認である。何度確認しあつても、結局はこれを守らない朝鮮政府の対応は、現在に通じる。

くされた。これを朝鮮はどうみたのか。かくのごとき日本は「恃むに足らず」とみただけであり、清国にかわつて新たに朝鮮半島で影響力を強めるロシアへの「事大」を強化していった。

三国干渉後の日本を取り巻く国際環境には、騒然たるものがあった。日清戦争に勝利して清韓宗属関係の切断に成功したとはいえ、朝鮮の自立が可能となつたかといえは、実はまったくそうではない。清国の支配力は衰えたものの、同時にロシアの影響力が着実に増大していった。

清国への還付を余儀なくされた遼東半島は、その後、ロシアの租借地となり、日本が苦難の日清戦争で獲得した権益が、次々とロシアの手に落ちていった。

三国干渉以前、日本は朝鮮において親日派の金弘集を首班とする内閣を組成させ、「甲午改革」と称する日

本主導の改革を開始した。しかし、三国干渉により遼東半島還付を日本が吞まされたことにより、朝鮮政府は日本「恃むに足らず」とみて、政府内の親露派がにわか勢いを増し、ロシアに急接近した。ロシアもこれを好機と見立てて閔氏一族に取り入り、朝鮮宮廷のロシアへの傾斜が顕著なものとなった。

陰謀家として知られる在朝鮮ロシア公使カール・ウエーバーの動きは迅速であった。ウエーバーは親露派と強く結びつき、国王の高宗をロシア公使館に移し、国王はロシア公使館から詔勅を発することになった。

ロシア公使館が王宮となつてしまつたのである。「露館播遷」といわれる。「播遷」とは遠くさすらうの意、ロシア公使館で遠くから朝鮮を摂政する、といった感じである。

うとしていた。朝鮮論への訣別が近づく。

福澤も年老い、朝鮮にはもはや諦観しなくなり、最後の朝鮮論を明治三十一年四月二十八日付として書き、みずからへの反省を認めて筆を最終的に収める。そうして、三年後の二月に逝去。福澤の自省の弁「対韓の方針」は、こうである。

朝鮮政策の原因を日本人に求めるとするれば、日本人は、一つには「義侠心」、もう一つには「文明主義」、この二つを「過剰」に持ち過ぎたのだという。日本人は自国の利益などをさして考えることなく、義侠心のみをもって朝鮮の独立と富強のために努めた。

日本人は日清戦争をただ義侠のための戦いだと心得て戦つたのだが、外交や戦争などにおいては義侠心のごときものは結局のところは無益である。今後は義侠心など朝鮮に対し

ウエーバーの強い圧力を受けて、内閣総理大臣の金弘集は追放、光化門外で親露派の民衆によつて撲殺、屍は市街地にさらされた。ロシアの権勢はいよいよ強く、日本の朝鮮における勢力は目にみえて減衰していった。

朝鮮はこの時点で、もはや国家としての体をなしていなかったといつていい。日本は三国干渉によつて遼東半島還付の屈辱を受ける一方、辛くも自主独立の朝鮮を手にしたものの、それも束の間、ロシアによつて朝鮮は蹂躪されてしまったのである。

福澤、朝鮮との訣別

福澤思想に深く共鳴して朝鮮の文明化に強い意思をみせていた金弘集の無残な死に、福澤の憤怒は頂点に達する。金弘集ばかりではない。福

ては一切断念しようではないか、という。

もう一つは、自国の文明開化は朝鮮にも有効な経験であると考え、文明主義をもつて朝鮮を「教導」しようとしてきたのだが、これも旧套の思想に妨げられ、逆に教導者である日本人が嫌悪の対象となつてしまった。日本の教導によつて朝鮮伝来の習慣を変え得ると考えることも今後はやめよう、と自省の念を深める。

要するに、朝鮮政策の失敗を最後には福澤も認めざるを得なかったのである。そうはいつてないが、「脱亜論」を執筆した時点で、真に「脱亜」を圖っておくべきであった。義侠心と文明主義をもつてすれば朝鮮の独立、事大主義の克服も可能であったとするみずからの考え方の足らざるを憂いて、福澤の朝鮮論は終わる。

福澤最後の「脱亜論」は明治三十一

澤と深い縁でつながっていた朴泳孝や兪吉潯などが要職を占めての朝鮮改革が、いかんともし難く渋滞していくのを見て、福澤の挫折感には一段と大きなものがあった。

力を張るロシアに寄りかかり、改革をまるで進捗させようとしない朝鮮への福澤の憤懣は尽くせないものがあった。小稿の冒頭に掲げた論説「事実を見る可し」では、福澤はその気分をストレートに伝えている。

朝鮮人の改革への気概のなさはどうしようもない、「常に道徳仁義を口にしながら其衷心の腐敗醜穢、殆んど名状す可らず」といい、「朝鮮人を相手の約束ならば最初より無効のもの」と覚悟しておいたほうがいいといつて、朝鮮とはもう付き合いたくないという口吻へと変化していったのである。福澤の朝鮮への恋も醒めよ

年四月二十八日の「対韓の方針」であった。

「完全かつ最終的に解決されたこととなることを確認する」(日韓請求権並びに経済協力協定第二条、昭和四十年)といつても、「最終的かつ不可逆的に解決されることを確認する」(日韓慰安婦合意、平成二十七年)といつても、そんな合意は弊履のごとく捨て去つてしまふのが韓国である。北朝鮮得意の「卓袱台返し」と少しも変わるところがない。

「朝鮮人を相手の約束ならば最初より無効のもの」と覚悟して、事実上自らから実を収むるの外なきのみ」

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総務大臣補佐、八五年「成長のアジア 停滞のアジア」で吉野作造賞受賞。九〇年「西太平洋の時代」でアジア太平洋経済大賞受賞。九六年「神経症の時代」で関高健賞正賞受賞。